



大阪中之島美術館 新館長就任のお知らせ

大阪中之島美術館は、2026年10月1日付で新たな館長に植木啓子（うえき・けいこ）が就任することとなりましたので、お知らせいたします。



植木啓子

新潟県生まれ。サントリーミュージアム[天保山]（2010年休館）の学芸員として「マッキントッシュとグラスゴー・スタイル」「ジャン・ヌーベル」「レイモン・サヴィニャック」など、主にヨーロッパの建築・デザイン展を企画担当。大阪からの発案発信となった「純粋なる形象- ディーター・ラムスの時代」展は、東京、ソウル、欧米3都市に巡回し、その展覧会カタログとグラフィックワークはニューヨークADCで金賞を受賞するなど、国内外で評価された。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）移籍後は、PFI事業スキーム構築に取り組みつつ、デザインの記録と記憶を保存する「インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト」や展覧会「デザインに恋したアート♡アートに嫉妬したデザイン」（2023年）をはじめ、企業や行政、大学等とのデザイン連携や振興の場の創出に取り組んでいる。

館長就任にあたって

大阪中之島美術館は、コロナ禍にありながらも想像を超える活況の恩恵に浴した2022年の開館や、大阪・関西万博の熱気とともに賑わいを見せた2025年の挑戦を経て、今年2026年、開館5周年を迎えました。

長い準備室時代に蓄積した学芸員の知識と、多様な分野から集結した管理、運営、広報スタッフの経験が、日本の美術館界では他に例のないPFI事業コンセッション方式運営のもとに融合し、これまでの活動のエンジンとなってきました。そして、開館以来ご来訪くださったのべ300万人のお客さまと、寄附・協賛、協力、出品といったさまざまなかたちで力をお貸しくださった企業・団体や個人、全国の美術館・博物館等のみなさまの支えなしに、今の私たちはありません。

大阪中之島美術館が開館前から掲げてきた4つの「めざす姿」に通底するのは、「小さく構えること」と「足元を見つめること」というたった2つの、しかしとても大切なことです。箱ではなく活動体としての美術館を、その扉の外につながりや助けを求め、ここ大阪という地で、みんなでつくっていききたい。それは変わらず私たちの核となっています。

前館長は私たちを牽引しながら、多くの気づきを残してくれました。新たな体制はその気づきを糧として、再びスタートラインに立ちます。ここはあわてずダッシュは控え、長距離を見据えて一步一步確実に刻んでいくところでしょう。コレクションやアーカイブズのさらなる活用やその源になる研究調査の深化、ラーニングや広報・マーケティング、施設活



用の充実、変化する社会情勢のなかでのリスクマネジメント等の課題に丁寧に取り組みながら、大阪中之島美術館らしいと評価いただける多彩な展覧会をもって、明日も今日と変わらず、そしてずっと、みなさまのお越しをお待ちできるよう努めてまいります。